

大人用

伝道地便り

2019年 第1期 南アフリカ・インド洋支部

第1話 「暗闇から抜け出して」	モザンビーク
第2話 「聖書で武装」	モザンビーク
第3話 「3人の妻を持つ男性」	サントメ・プリンシペ
第4話 「安息日のために全てを失う危険」	サントメ・プリンシペ
第5話 「豚肉との問題」	サントメ・プリンシペ
第6話 「秘訣は友だちになること」	サントメ・プリンシペ



セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部

伝道地便りの用い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

1. 暗闇から抜け出して

モザンビーク



アティージャ・ジャマル・カミニテ 57歳

アティージャは8歳の時、モザンビークの主要都市で人口の8割がイスラム教徒であるナンプーラという街に住んでいました。そこから少し離れた村に住む祖母を訪ねた時、彼女はセブンスデー・アドベンチスト教会を初めて知りました。

アドベンチスト教会の前を彼女が通りかかると、教会の長老が中で食事をしないかと誘って来ました。そして食事が済むと、これから礼拝があるから残って聞かないかと誘われました。アティージャは今でも鮮明にその時の礼拝のお話を覚えています。牧師先生は、マタイ 24 章にあるイエス様の再臨や、どのように死者が蘇えるかについて話されました。そのお話はアティージャの幼い心を感動させました。その1か月前に、彼女は4歳の妹ムアナシャを貧血で亡くしていたのです。

「牧師先生のお話を聞いていると、また愛する妹に手で触(ふ)れることができると信じることができました。」

7年が過ぎ、アティージャは15歳になり、ある男性と結婚しました。その男性はナンプーラの日曜教会の家庭で育ちましたが、アドベンチスト教会に出席していました。

ある安息日、彼の誘いでアティージャは教会に行きました。「世の終わりのラッパ鳴りわたる時」という讃美歌で安息日学校が始まり、近くに立っていた6歳の女の子のはっきりとした優しい歌声にアティージャは聞き入ってしまいました。

「彼女の歌声を聞いた時、私は感動して、心に何かが起こるのを感じました。」と彼女は振り返ります。

その日から、彼女はアドベンチスト教会に集う決心をしたのでした。

モザンビーク北部では、大切な事を決める時は必ず事前に年配の親戚に相談をすることが伝統となっています。そこでアティージャは夫と共に、彼女の伯母のカーメンを訪ねました。この伯母は彼女を育てた伯母で、(魔力によって治療をする)呪術師でした。

カーメンはアティージャのアドベンチストになりたいという願いを聞くと、「あなたの母親の所へ行って、このことについて話をしなさい」と言いました。

未亡人であるアティージャの母は、「私はあなたを育てていないから、あなたの伯父の所へ行って話しなさい」と言いました。

伯父のカンディードは承認せず、もしバプテスマを受けるならばアティージャとは二度と会わないという誓いを立てたのです。

その言葉を聞きアティージャは恐れましたが、彼女はそれでもバプテスマを受ける決心をし、彼女と彼女の夫は同じ日にバプテスマを受けました。しかし、家族は誰一人として来ませんでした。

そのうちにアティージャはディオニシオという男の子を産みましたが、あるときその子が深刻な病に侵されてしまいました。彼女は治療のために伯母や他の呪術師の所へ行くことを拒みしました。

ある日の夕方、伯父のカンディードが槍を持つ

てアティージャの家の玄関に現れました。

彼は、「私はこの子が死ぬのを待っている。この子が死んだ時は、お前の首を突き刺してやる。」と言うのです。

2日経っても赤ちゃんは飲み食いができず、どんどん弱っていきました。アティージャと彼女の夫は涙ながらに祈りました。そして3日目になってようやく授乳することができ、病院での検査でもう大丈夫だということが分かりました。

伯父は槍を持ち、家に帰っていきました。

「悪魔の敗北を私たちは見ました。私の息子はもう死ぬところでしたが、神様のお恵みによって生かされたのです」とアティージャは振り返ります。

この癒しを通してアティージャの姉妹の一人は感銘を受け、アドベンチスト教会に加わりました。そしてその1年後、アティージャの兄弟ともう一人の姉妹がバプテスマを受けました。するとアティージャの母もバプテスマを受け、しばらくして伯母のカーメンも後に続いたのです。「彼女のバプテスマの日、牧師先生は3回彼女を水に沈めました」と、アティージャは振り返ります。

伯母のカーメンが最初に水から上げられた時、誰も理解することのできない言葉を叫び始めました。牧師は彼女を見るなり、「もう一度バプテスマを授けよう」と言いました。

彼女は2回目に水から上げられても尚、理解不能な言葉の数々を叫び続けていました。3度目のバプテスマでようやく悪霊は出ていったとアティージャは言います。そして現在、伯母のカーメンは教会の女執事をしています。

アティージャがバプテスマを受けたら決して会わないと誓っていた伯父のカンディードは、彼の妻のバプテスマの後アティージャの家を訪ねてきました。すると彼もバプテスマを受けたいと言うのです。そして、バプテスマの1年後、彼は亡くなりました。

アティージャは言います。「私の家族全員がキリストに献身し、教会員となりました。」「主を褒め称えます。私の事を間違っているとって反対していた家族が皆、今やセブンスデー・アドベンチ

ストになったのですから。」

現在アティージャは 57 歳になり、牧師夫人として活動しています。夫のラザロは神学の勉強を終え、ナンプーラで牧師として仕えています。

今回の 13 回安息日献金の一部は、このナンプーラにいる HIV や AIDS で親を失った子供たちのための孤児院を建設する為に使われます。皆様の献金を感謝いたします。

・下記のリンクから、アティージャを観ることができます。

bit.ly/Atija-Caminete

・下記のリンクから、この物語の写真を見ることができます。

bit.ly/fb-mq

宣教メモ

- Casa Publicadora do Indico は教会の出版社で、モザンビークの首都マプトにあります。
- 1937 年に 1500 人が最初のキャンプミーティングに参加しました。人々はおずおずと怪しみながらやってきましたが、話を聞いてくれました。しかしウェブスターが写真を撮ろうとすると、茂みのなかに逃げ込んでしまったのです。1939 年、最初の改宗者がバプテスマを受けました。

2. 聖書で武装

モザンビーク



モイゼス・フランシスコ・ペレベ 32歳

モイゼスは学校を退学になり、モザンビークの軍隊に入隊しました。彼の父親は、軍に入ればお酒やドラッグを止められるだろうと期待していました。

入隊後間もなく、軍の食堂でモイゼスはアルフレドというセブンスデー・アドベンチストの信徒に出会いました。「彼のライフスタイルに感心しました。」とモイゼスは言います。「彼は、自分のお皿から食べ物を取ると、私にくれたのです。」

アルフレドは食べる物に気を付けていて、みんなが好きな魚でも彼が汚れていると思う物は食べませんでした。アルフレドが食べる物を選ぶおかげで自分の食べ物が増える、とモイゼスは考えました。

「ある種類の魚が出される時は必ず彼の隣に座りました。私にその魚をくれると分かっていたからです。」と、モイゼスは振り返ります。「彼はとても私に優しくしてくれました。」

2週間食事を共にした後、軍警察の訓練のためにモイゼスは他の場所に移動となりました。兵舎でモイゼスの隣になった兵士は、ベッドに聖書を置いていました。モイゼスが起きると聖書が目に入り、寝る時にもまた聖書が目に入って、彼を悩

ませました。なぜなら、聖書は牧師や年配の人たちのためのもので、若者のものではないと思っていたからです。

ある日、モイゼスはその兵士になぜ聖書を持っているのか聞きました。

「僕はクリスチャンなんだよ。」とその若者は答えました。

「神様を信じているのか？」モイゼスは聞きました。

その兵士は信じていると言って、ヨハネによる福音書3章16節を教えてくださいました。それは、「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである」という聖句でした。

モイゼスは聖書を貸してほしいと頼みました。そして読んでいくうちに、神様を信じるようになっていきました。彼の父親は、モイゼスの新しい信仰を喜び、聖書を贈ってくれました。

軍警察の訓練が終了して、モイゼスは軍警察官として働くために軍の部隊に戻りました。

部隊でモイゼスが聖書を読んでいるのを見た日曜教会の兵士が、「毎日午後6時から聖書研究をしているグループを知っているから、もし行きたければ連れて行くよ」と誘ってくれました。

その日の夕方、モイゼスはその兵士について聖書研究に行きましたが、混乱して帰ってきました。混乱しているのを見たその兵士は、「もう一つのグループも6時から聖書研究をしているから、そこに明日連れて行ってあげるよ。でも僕は彼らが嫌いなんだ」と言うのです。

「何で嫌いなの？」とモイゼスが聞くと、「僕の教会について話すからさ」と彼は言いました。

次の日の夕方、モイゼスはアドベンチストの聖書研究に参加しました。驚いたことにそのグループのリーダーは、食堂でよく食べ物をくれたあのアルフレドと聖書を学び、バプテスマに至った人

でした。

その時の聖書研究はマラキ 3 章 8 節についてでした。「人は神を偽りうるか。あなたたちはわたしを偽っていながらどのようにあなたを偽っていますか、と言う。それは、十分の一の献げ物と献納物においてである」と主は言われます。

モイゼスは十分の一献金を献げたことが無かったため、この言葉が彼の心に刺さりました。そして次の日の夕方、彼はこの聖書研究に参加し、第七日目の安息日について学びました。その日の夜、彼はベッドで泣きました。仲間の軍警察官が、彼が泣いているのに気づき、「誰に殴られた？ やり返してやる」と言いました。

この警察官には、モイゼスは誰か人に殴られたのではなく、神様の言葉によって殴られたということが分からなかったのです。

次の安息日、モイゼスは彼の新しい友人たちといっしょに、14km 歩き一番近くのアドベンチスト教会に行きました。彼は十分の一献金を初めて神様にお返ししました。それからというもの、毎週安息日にモイゼスは教会に集うようになり、軍に入ってからわずか 2 年後の 22 歳の時にバプテスマを受けたのです。

兵役の後、モイゼスは警察の組織で働いていましたが、安息日問題のため辞めました。そして彼は一軒一軒を訪問して回る文書伝道者になり、その後モザンビークアドベンチスト大学に入学しました。

現在モイゼスは 32 歳で、大学で神学科 3 年目を終えようとしています。「私の父親は私の行動を変えるために軍に私を入れましたが、神様はより大きな計画をされていたようです。神様は私にクリスチャンになってほしかったのです」と彼は言います。

今期の 13 回安息日献金の一部は、モイゼスが学ぶモザンビークアドベンチスト大学を拡張するための資金となるほか、モザンビークにいる子どもたちで、親が聖書を買うことができない子どもたちに聖書を提供するために使用されます。皆様の献金を感謝いたします。

・ **Moises** とはポルトガル語でモーセのことです。ポルトガル語は、モザンビークの公用語です。

・ 下記のリンクから、モイゼスを観ることができます。

[Bit.ly/Moises-Pelembe](https://bit.ly/Moises-Pelembe)

・ 下記のリンクから、この物語の写真を見ることができます。

[Bit.ly/fb-mq](https://bit.ly/fb-mq)

宣教メモ

- ・ モザンビークの首都、マプトはアカシアの都市として知られています。道路の端にアカシアの木がよく生えているからです。
- ・ 田舎の人々の食生活は、キャッサバ芋が主食になっています。キャッサバ芋は焼いたり干したり、おかゆのようにすりつぶすこともできます。
- ・ モザンビークの識字率はとても低く、最新の統計データによると大人の識字率は 54 パーセントでした。

3. 3人の妻を持つ男性

サントメ・プリンシペ



カルロス・フレイタス 48歳

西アフリカのギニア湾に浮かぶ島国サントメ・プリンシペの首都、サントメに住むカルロスには3人の妻がいました。

彼と7人の兄弟たちは、セブンスデー・アドベンチストである祖母のいる家で育ちました。ところがその祖母が亡くなると、彼も兄弟たちも教会から離れてしまったのです。

カルロスが21歳の時、彼は内縁の妻で日曜教会に通うエディティと一緒に住むようになり、女の子の赤ちゃんが生まれました。

するとすぐに言い争いが起こりました。島では女の子が生まれると、危険から守られるという意味でイヤリングを付ける習慣がありました。カルロスは教会には集っていませんでしたが、装飾品には反対であった為、エディティに娘の耳にピアスの穴を開けないように頼みました。

この問題の話し合いで熱くなっている最中、エディティはカルロスの知らない所で神父から赤ちゃんに洗礼を授けてもらっていたのです。

カルロスはこの洗礼について知ると、エディティの元を去り、マリアという二人目の内縁の妻を見つけました。

一方エディティはカルロスとの関係を断ちたく

ありませんでした。

「そういうわけで私は2人の妻を持つようになってしまったのです。」とカルロスは言います。

しかし彼は更に3人目の女性と出会い、交際を始めました。やがて一緒に住むようになり、子どもが生まれました。

カルロスは最初の妻との間に5人の子ども、2番目の妻との間に4人の子ども、3番目の妻との間に一人の子どもが生まれました。

カルロスは3つの家族に時間を費やさなければならなかったため、最初の妻は寂しさから、あるアドベンチストのカップルと親しくなったのでした。そのカップルと一緒に教会に行くようになり、やがてバプテスマを受けました。

一方カルロスは、ボイス・オブ・アメリカというアメリカ政府の国営放送局に務めていて、神様への関心はほとんどありませんでした。しかしある安息日、2人の娘のバプテスマ式があるからとイディティに誘われ、参加することにしました。

10代の2人の娘が教会の壇上から讃美歌を歌うのを聞き、カルロスは涙しました。彼は小さい頃教会に行っていた時の事を思い出したのでした。涙を周りの人に気付かれないように、顔を隠しました。その日以来、カルロスは最初の妻と教会に行くようになりました。

カルロスが教会に行っていることを2番目の妻のマリアが知った時、私を見捨てようとしているのか、と彼を責めました。

マリアは、「アドベンチストは結婚していないカップルと一緒に住むことを認めていない。ということは、あなたはエディティと結婚しようとしている。」と言いました。

カルロスは結婚をするために教会に行っているのではないと否定しました。「救いのために行っているのだ。君にも救われてほしいから、私と一緒に教会に来てほしい。」と彼はマリアに言いました。

マリアも教会に行くようになりました。安息日ごとに、カルロス是最初の妻を教会に車で連れて行き、2番目の妻をもう一つの教会に車で連れて行きました。交互に2人の妻たちそれぞれと神様を礼拝していました。

その頃、3番目の妻がもう一人の男性と出会い、カルロスの元から去り、事態はより複雑になりました。カルロスはどちらの女性と結婚したら良いのか考えるようになったからです。

カルロスは祈り、2か月の間毎週安息日に断食をしました。そのうちに、最初の妻と結婚をしたいという思いが強くなりましたが、彼は聖書からの確証を強く望んでいました。ある日彼は聖書を開き、こう祈りました。「神様どうか聖書の中に答えを見出すことができますように。」

手元の聖書に目を向けるとそこはマラキ書でした。そして目に留まった場所がマラキ書2章14節「あなたたちは、なぜかと問うている。それは、主があなたとあなたの若いときの妻との証人となられたのに、あなたが妻を裏切ったからだ。彼女こそ、あなたの伴侶、あなたと契約をした妻である。」という箇所でした。

最初の妻と結婚するというカルロスの決断に、2番目の妻は悲しみました。2人で共に泣きましたが、彼女は理解してくれました。カルロスは、2013年12月29日にエディティと結婚し、その後バプテスマを受けました。

「それから私の人生は新しいものとなりました。」とカルロスは言います。「今の私は新しい創造物です。世界のどこにでも、行って神様が私になさってくださいましたことを伝える準備ができています。」

今期の13回安息日献金の一部は、サントメでの教会建設費用に用いられます。皆様の献金を感謝いたします。

• 下記のリンクから、この物語の写真を見ることができます。

bit.ly/fb-mq

• 次回もカルロスのお話が読めます。

宣教メモ

- アドベンチスト達がサントメ島で働きを始めたのは、ポルトガル人の文書伝道者、ホセ・フレーシが到着してからアドベンチストの働きが始まりました。
- 1946年には小学校が開きました。キャピトリーナ・グラビが最初の先生でした。平均250名の出席者がありましたが、1975年に共産主義政府によって閉鎖されてしまいました。
- サントメ・プリンシペ教区は、元々アンゴラ教団の管轄化にありましたが、今では南アフリカ・インド洋支部の管轄下になりました。

• 下記のリンクから、カルロスを観ることができます。

bit.ly/Carlos-Freitas

4. 安息日のために全てを失う危険

サントメ・プリンシペ



カルロス・フレイタス 48歳

バプテスマの後、アメリカ政府の国営放送局、ボイス・オブ・アメリカに務めるカルロスは、土曜日は働けないということを上司に伝えました。

するとアメリカ人の上司はカルロスをいぶかしげに見て、「安息日を守るのは旧約聖書の教えであって、クリスチャンは新約聖書に従うのだよ」と言いました。

カルロスは、島国サントメ・プリンシペの首都サントメにある自宅に戻ると、新約聖書にある安息日について書かれた箇所のリストを作りました。

そして次の日、彼は上司にそのリストを手渡し、「安息日は新約聖書にも記されていますから、守る必要があります」と言いました。

「それが君の最終判断かい？」と上司は聞きました。

「はい。私は安息日を守ると決めました」とカルロスは答えました。

上司はカルロスの手を握り、「安息日のことについて、職場で僕に挑戦してきたのは君が初めてだよ」と言いました。

話し合いはそれで終わり、その上司がカルロスに土曜日に働くように言うことはその後一度もあ

りませんでした。

10人の父親であるカルロスは、放送局の電気技師として働いていました。彼の仕事の一環として、放送局の発電機に使う燃料を船から下ろすという作業がありました。船が木曜日に着くとすぐに、カルロスと彼の同僚たちは燃料を船から下ろし始め、通常金曜日にはその作業は終わるものでした。

するとある日、船は1日遅れの金曜日に着いたのです。

カルロスは、サントメ出身で熱心な日曜教会の信徒である新しい上司に訴えても仕方がないと考え、アメリカ人の部長の所へ行きました。

部長はすぐに、金曜日の午後5時半に退勤したいというカルロスの申し入れを却下しました。

カルロスは、「でも私は神様との約束があるので」と言いました。

「決めるのは君次第だよ」と、部長は言いました。

カルロスはトイレに閉じこもり、祈りました。サントメで良い仕事を見つけるのは簡単ではなかったもので、「私の家族は一体どうになってしまうのだろう」と彼は思いました。クビになりたくはありませんでしたが、神様を大切にしたいという思いの方が強かったのです。彼は午後5時半まで働いて、退勤することにしました。

もうすぐ午後5時半という時、船のエンジンが水浸しになってしまいました。カルロスと同僚たちはどうにかしようと格闘しましたが、状況は更に悪くなる一方でした。遂に男たちは部長の待つ岸に引き上げてきました。

「かなり良くない状況です。この週末に燃料を下ろすのは不可能です」と一人の同僚が言いました。

部長は一言も発しませんでした。カルロスは安息日のため、家に帰りました。

カルロスは週末の間ずっと、月曜日に部長に会うのが怖くてなりません。浸水を自分のせいにされるのではないかと彼は心配していたのです。

月曜日、部長は一言も発しませんでした。火曜日も水曜日も無言のままでした。一週間過ぎても、彼は何も言いません。

すると一人の同僚がカルロスに言いました。「船のことで部長が何て言っていたか知っているかい？ 神様がやったことだと言っていたんだ。」

カルロスは信じられませんでした。カルロスは家で妻と共に、仕事を守って下さったことを神様に感謝しました。

数日後、もう一人の同僚が部長の考えていたことをより詳しく教えてくれました。実は部長は密かにカルロスを午後5時半に家に帰そうと計画していたのです。しかしその決断を伝える前に、船のエンジンが浸水してしまったのです。この出来事の結果、安息日には誰も働くことができませんでした。

カルロスの知らない所で、会社の警備員がカルロスの事をしばらく観察していて、安息日の信念を貫くと一体どうなるのか、と思って見ていました。神様が船を使ってカルロスをお助けになったのを見て、その警備員は「君の神様は素晴らしい！」と声を上げました。

その警備員はアドベンチスト教会に行き始めました。

カルロスはそれ以来一度も安息日問題に直面していません。

「神様は、神様を信頼する全ての人に良くして下さいます」とカルロスは言います。「解決するのが不可能だと思った問題が幾つかありましたが、私が何もしなくても神様が解決して下さいました。」

彼の国の人口 20 万人のうち多くの人々が安息日を知りません。人口の半数以上はローマカトリック教徒です。アドベンチスト教会はわずか8千人の信徒で、13の教会と56の集会所で礼拝をしています。

カルロスは、安息日についての証をするのが大

好きです。

「それが私の仕事なのです。自分の経験と聖書から得たものを人々に伝えるのです」と彼は言います。「私の願いは、神様の御言葉を伝えるために、自分に出来ること全てを行うことです。」

今期の13回安息日献金の一部は、サントメに必要な教会建設費用として用いられます。皆様の献金を感謝いたします。

・下記のリンクから、カルロスを観ることができます。

bit.ly/Carlos-Freitas

・下記のリンクから、この物語の写真を見ることができます。

bit.ly/fb-mq

・前回はカルロスのお話でした。

5. 豚肉との問題

サントメ・プリンシペ



ジルソン・ネト 29歳

私が17歳の時、近所の人からセブンスデーアドベンチスト教会のことを教えてくれました。しかし、私は豚肉が大好きだったので、豚肉を食べないアドベンチストには興味がありませんでした。

あるとき、サントメプリンシペの首都、サントメの島の反対側で開かれていた伝道講演会に誘われました。全ての集会に参加し、もっと知りたくなったので自分の名前を書きおきました。

するとすぐに近所の人から、教会にあなたの名前があったから安息日いっしょに教会に行こう、と誘ってきたのです。私はとても驚いて、「島の向こう側で紙切れに書いた僕の名前が、どうやってあなたの教会に伝わったのですか？」と聞いてしまいました。

土曜日は仕事をしていたので、その近所の男性と教会には行きませんでした。私は建設現場で働いていました。

私が教会に来ていないのを知り、近所の人から夕方に聖書研究をしようと提案してきました。数週間が過ぎ、1回仕事を休んで教会に行ってみることにしました。

教会で私は近所に住む人たちにたくさん会い、彼らは私が教会に来たことをとても喜んでくれま

した。しかしそれは私にとって問題を生むことになりました。安息日にまた仕事を休むことができなくなったのです。たくさんの近所の人たちが私を教会で見ているから、安息日に仕事に向かっていたら、どこへ行くのかと聞かれてしまいます。

次の安息日、誰にも見られないように、私は遠回りのいつもと違う道を通って仕事に行きました。しかしそれでも一人の教会員にばったり会ってしまい、どこへ行くのかと聞かれました。

「髪を切りに行ってきます。」と私は嘘をつきました。

その日1日罪悪感でいっぱいでした。仕事の後、また回り道をして帰りましたが、それでもまた教会員の人たちに会いました。「何で教会に来なかったの？」と彼らに聞かれ、仕事に行っていたと正直に伝えました。その日から、土曜日に働くのを辞める決心をしました。そしてすぐ、私は仕事を失いました。

私の家族は一人もアドベンチストではなかったので、両親は働いていない私に腹を立てていました。私の母は、私が食べられないものを作りました。母は全ての料理に豚肉を使うのです。米、スープ、そして副菜などです。豚肉は大好きでしたが、私は食べるのを拒んでいました。空腹のまま床に就くことが何度もありました。

母は、「なぜ豚肉を食べない教会にあなたは行くの？」と言い、父は、「なぜ土曜日に働かないのか？」と言いました。

7人の兄弟たちは、苦境にある私を何も言わずに見ていました。

9か月後、私はバプテスマを受けました。

牧師先生が、新しい教会員たちに歓迎のお話をされた時、一人の女性がこの決断によって霊的な問題に直面するだろうと言いました。しかし私は、「それはいいです。私はもう既にたくさんの問題に直面していますから」と言いました。

しかし彼女の言ったことは真実でした。私が両親にバプテスマを受けたと告げると、私は家から追い出されたのです。私はどこへ行ったらいいのか分からず泣きました。2か月の間、両親が起きる前に家を出て、両親が寝てから家に帰りました。

同じ日にバプテスマを受けた女性が食べる物を与えてくれました。日中は歩き回りました。仕事もなく、何もすることがありませんでした。私は泣いて祈りました。「神様、どうか私の信仰を強め、仕事を見つけさせて下さい。」

しばらくして、台湾系の農業の会社がプロジェクトのアシスタントとして私を雇ってくれ、両親に給料のうちいくらか渡せるようになりました。そのおかげで両親との関係も修復されました。

そして素晴らしい神様の奇跡が起きました。7人の兄弟のうち5人がアドベンチストになったのです。その後2人の従兄弟がバプテスマを受け、最終的に10人の家族が教会に加わりました。私の父親でさえ、脳梗塞で半身不随となる前、何回か教会に行っていたのです。

現在、私はサントメに唯一のアドベンチスト学校で働いています。私は子どもたちにガーデニングや野菜の育て方を教えています。

そして結婚もしました。私の一番のどん底時代に食べ物を与えてくれていた女性の妹と恋に落ちたのです。私たちには1歳になる娘もいます。

私の信仰を保ってくれる聖書の約束は、詩編125編1節「主に依り頼む人は、シオンの山。揺らぐことなく、とこしえに座る」です。

神様に信頼する人はシオンの山のように、永遠にとどまるのです。

今期の13回安息日献金の一部は、サントメにある唯一のアドベンチスト学校に講堂を建設するために用いられます。皆様の献金を感謝いたします。

・下記のリンクから、この物語の写真を見ることができます。

bit.ly/fb-mq

・下記のリンクから、ジルソンを観ることができます。

bit.ly/Gilson-Neto

6. 秘訣は友だちになること

サントメ・プリンシペ



ビターリナ・メンデス・モレイラ 57歳

西アフリカの湾岸にある小さな島国サントメ・プリンシペで、ビターリナが2人目の赤ちゃんを生もうとしていると、全てが酷く悪い状況になってしまいました。

出血が酷く輸血が必要になったのですが、医者が間違えて彼女と違う型の血液を輸血してしまったのです。男の子の赤ちゃんは無事に生まれましたが、ビターリナは両足が重度の感染症になってしまいました。彼女の命を救うため、医者たちは彼女の両足を切断しなければなりませんでした。ビターリナはまだ19歳でした。

9か月後自宅に戻った時、彼女の夫は他の女性の所に行ってしまったことを知りました。鬱状態になり、彼女は自殺も考えました。

その時、一人の年配のセブンスデー・アドベンチストの友達が彼女を訪ねてくるようになりました。ビターリナの家には溜まった洗濯物を毎週近くの川まで持っていき、洗ってきてくれました。その女性の主治医が、健康上の理由から彼女に川で歩かないように言うと、彼女は他の教会員たちを連れてきて洗濯をしてくれたのです。

ビターリナは皆の手助けをありがたいと思う反面、違和感を覚えていました。

「私はアドベンチストではなかったので、ためらいました」と彼女は言います。

「なぜ彼らが私の洗濯物を洗ってくれるのか、理解ができなかったのです」

ビターリナはその女性たちに洗濯物を少しだけ渡して、残りは部屋に隠すことにしました。2週間、「これだけです。今週はあまり洗濯物がないのです。」と伝えたのです。

アドベンチストの女性たちは信じられなかったのです。彼女の家を探しました。すると隅に山積みになされた洗濯物を見つけ、洗濯したのでした。

ビターリナは、どうにか私を生かしてくださいと神様に祈りました。しばらく経った後、彼女は古い手動のミシンを手に入れ、生地を裁断し、ズボンを縫って作る技術を身につけました。彼女のビジネスは上手く行き、時々帰宅する夫との間に5人の子どもを設けました。そして、彼女の夫は死んでしまいました。

一人の教会員がビターリナと聖書の学びをしましたが、彼女は興味を示しませんでした。彼女は食事を変えたくなかったのです。

ちょうどその頃、アドベンチストの牧師が2週間の伝道講演会を開きました。

「伝道講演会に行った時に、私の人生で神様がなさった素晴らしいことを理解できるようになりました」とビターリナは言います。「神様は私の祈りに答えてくださり、私はミシンを使ってお金を稼ぐ方法を身につけました。これは私が福音を受け入れた理由の一つです。」

ビターリナは毎晩講演会に参加し、バプテスマを受けました。彼女は新しく見つけた信仰を伝えたくて、自分の証を聞いてくれる人みんなに話しました。

「私を見て下さい」彼女は家に来てくれた人たちに言いました。「神様は私に働きかけて下さっています。だから私は働くことができるのです。神

様は素晴らしいお方です。皆さんも神様に信頼する必要があります。」

このような会話を通して、ビターリナは7人の人たちを彼女の集う2マイル（3キロ）離れた所にあるアドベンチスト教会に来るよう説得しました。ビターリナが何週間も彼らのバス代を払いました。その7人全員がバプテスマを受け、今では教会員となっています。

ビターリナは彼女の家以外の場所でも聖書研究グループを立ち上げ、6人の人たちがバプテスマを受けました。

そのうち彼女の2人の子どもを含む40人もの人々がバプテスマを受け、教会のリーダーたちは彼女の住む地域に教会を開くことを提案しました。土地を購入する資金が不足していたため、教会はビターリナの申し出を受け入れ、彼女の家の外に一時的な建物を建てることにしました。こうして木造の教会が、2017年9月に建てられました。

「家の玄関から教会が見えるなんて本当に嬉しいです」ビターリナは家のリビングのソファに座りながら言います。「何より嬉しいのは、沢山の人が神様を受け入れたことです。」

ビターリナは、人々をキリストに導く秘訣は友達になることだと言います。

「友情なしに人々を神様に導くことは困難です。私は地域の人たちとまず友だちになり、教会に招待するのです。」

彼女の一番好きな聖句はマタイ6章33節のイエス様の言葉です。「何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。」

「この聖句は私にとって励ましです。神様をまず先にすれば、神様は私に必要な全てを与えて下さると書いてあるからです。そして本当に与えて下さっています」と彼女は言います。

今期の13回安息日献金の一部は、地下室や老朽化した建物で集会をしている多くのサントメの教会員のため、教会建設費用として用いられます。皆様の献金を感謝いたします。

・下記のリンクから、ビターリナを観ることができます。

bit.ly/Vitalina-Moreira

・下記のリンクから、この物語の写真を見ることができます。

bit.ly/fb-mq

宣教メモ

- ・この国には、世界最小のトキと世界最大のタイヨウチョウが住んでいます。また、巨大なベゴニアも数種類生息しています。